

編集デスク <9>

自然科学的なものの見方は即物的である。その対象は自然に存在するものであり、物にしても理法にしても、それにとりくむ人の存在以前からあったものである。もしその物の本質や理法の妙諦が把握されないとすれば、それはその真実の機構が蔽いかくされたり発見されなかつたためであるに過ぎない。

林檎の落ちるのを見て万有引力の法則を発見したのはニュートンの功績であった。しかし万有引力の法則は、落下する林檎にそそがれたニュートンの凝視以前にも厳然と存在する真理であった。原子力は、20世紀を待たなくても存在し得た。ただ20

世紀以前の人には、その驚異的なエネルギーが現実のものとして体験されなかっただけである。

ものを見る眼は、日常輝いていなければならない。そして、ものを見る主体と見られる客体とが没価値的に結びつく自然科学的なものの見方

ものを見て記録する心

長谷川 泉

ばかりでなく、ものを見る場合に精神や文化が介在したら、人間関係を見つめたりするような文化科学的なものの見方もまた大切である。自然科学的なものの見方よりも、ある意味ではこの方がむづかしいと言える。自然科学的なものの見方は一回きりでなく実験をくりかえしたりす

ることができるが、文化科学的なものの見方では、そこに主体の価値判断が強くいってくるし、また実験のきかない1回限りのものが多い。

見たものは、記録しておきたい。よく観察をし、正確に記録することによって、見るものと見たものは社会的、文化的な価値を持つにいたる。そして、よく見て、正しく記録することが、それを見、それを記録する主体の充実となつてはねかえってくる。そのようにして、主体が充実すれば、その主体はさらにすぐれたものの見方をし、見たものを正しく記録することが可能となる。

私たちの周囲には、ものを正しく見て、それを記録する機会が多くころがっている。その機会をよへ活用することが大切である。

の発言を一つ一つ繰り返して述べるといった行き過ぎをおかす点である。

なにもムリに要約しなければならないというわけではない。

④進行を妨げるメンバーの処置

進行を妨げるといってもいろいろの場合があるが、たとえば発言を一人占めにする。ムヤミに反対意見をとなえる。しばしば論議の内容とは無関係な発言をする。ごくつまらないことにこだわって全体の進行を妨げる。など、その処置についても一つ一つ考慮しなければならない。

対策としては、まず討議のはじめに、進行上必要な一応のルール、エチケットをお互いに確認し合っておくこと、悪いクセが出たら“〇〇さん、ちょっとルール違反ですよ”とか“ほうほう軽犯罪”といった角のたたない表現の言葉で調整して行くのがいいと思う。

⑤議論がそのときの本筋からそれたときの処置

この場合は、メンバーに対して、卒直に“少し横道にそれたのじゃないかしら……”とか“本筋は、何々じゃなかったの……”とか警告していいと思う。

司会者として、とくに注意しなければならないのは、自分自身脱線に気づかないで平気で横道にはいってしまう場合である。司会者にとって、論

点の把握ということがいかに大切であるか、常に念頭においておく必要がある。

以上で、一応討議の進め方について、原則論を述べたのであるが、実際例については、また稿を改めて紹介することにしたい。

そこで、本稿を終わるにあたって、討議についての事後評価の重要性にふれておこう。

事後評価は文字通り、討議そのものではなく、討議のできばえについて評価を加えることであるから、討議を中心とするグループ活動でメンバーの共通の問題点を解決し、実践への過程が見い出されたならば、それで討議の役目は立派に果されたわけである。こんな場合わざわざ評価を加えるために余分の時間を費すことはムダであるかもしれない。したがって、事後評価は、とくに教育の場としての討議、討議技術の討練のための実演実習としての討議を行なった場合などに実施すべきである。

事後評価の場をもつことによって

- ①司会者の在り方、メンバーの在り方が具体的に検討される（前記基準“できばえ”による）
 - ②論点把握のし方について、はっきり理解する。
 - ③物事を“評価する技術”を習得する
- などいろいろの効用がある。（筆者・東洋大学教授）